広島保健学学会学術集会の足跡

	テーマ等	プログラム概要
第１回	保健学研究の現在と未来 大会長：村上恒二　教授 平成 16 年 10 月 24 日	特別講演　「看護学における教育・研究の視座」 　新道幸恵　先生（青森県立保健大学　学長） 講演１「わが国の学校看護の歩み」 　津島ひろ江　先生（広島大学大学院保健学研究科　教授） 講演２「高齢者・障害者の転倒予防に関する研究の動向」 　新小田幸一　先生（広島大学大学院保健学研究科　教授） 講演３「運動および感覚作業時の自律神経機能」 　村田　潤　先生（広島大学大学院保健学研究科　助手）
第２回	少子高齢社会における保健学の研究と実践 大会長： 　川真田聖一　教授 平成 17 年 10 月 30 日	特別講演１「日本と北米の高齢者自立支援　－高齢者虐待の実態を通して－」 　小野ミツ　先生（広島大学大学院保健学研究科　教授） 特別講演２「高齢障害者の学習ニーズとその支援」 　藤原瑞穂　先生（広島大学大学院保健学研究科　講師） 招待講演　「高齢者の暮らしを支えるリハビリテーション」 　浜村明徳　先生（医療法人共和会小倉リハビリテーション病院　院長）
第３回	エイジングを楽しむ 大会長：横尾京子　教授 平成 18 年 10 月１日	特別講演「長寿県福井の秘密～エイジングを健やかに支える」 　日下幸則　先生（国立大学法人福井大学医学部　教授） シンポジウム　「エイジングを共に生きる」 ○楽しく生き活き 　備酒伸彦　先生（神戸学院大学総合リハビリテーション学部　助教授） ○チャレンジで生き活き 　大川加世子　先生（コンピューターおばあちゃんの会　代表） ○笑ッハで生き活き 　田中久江　先生（NPO 法人芸南たすけあい　代表） ○学んで生き活き 　田中秀樹　先生（広島国際大学心理科学部　助教授）
第４回	拓き拡げる健康への知と技 大会長：清水　一　教授 平成 19 年９月 30 日	特別講演「健康と生活支援の新しい科学・福祉工学の展望について 　－ DR GRIP から福祉工学へ」 　宇土　博　先生（広島文教女子大学人間科学部　教授） シンポジウム「他分野からの知と技の影響とさらなる学問発展への現状と展望」 ○ヘルスプロモーション概念を取り入れた認知症予防の取り組み 　西田征治　先生（県立広島大学　講師） ○重症児の健康への働きかけ：理学療法士と特別支援学校教師，親の会とのコラボレーション 　河村光俊　先生（広島国際大学　教授） ○看護が拓く知と技の意味－食べるための意志決定とケアを通じて－ 　迫田綾子　先生（日本赤十字広島看護大学　教授）

第５回	がん医療の未来～保健学からのメッセージ～ 大会長：片岡　健　教授 平成 20 年 10 月５日	特別講演「チーム医療が開くがん診療の将来」 土屋了介　先生（国立がんセンター中央病院　病院長） シンポジウム「がん患者の QOL 向上と在院日数短縮の両立をめざして」 ○がん医療におけるリハビリテーションの役割　現状と今後の課題 辻　哲也　先生（慶応義塾大学医学部リハビリテーション医学教室専任講師） ○臨床腫瘍科におけるチーム医療としての外来化学療法の現況と今後の課題 篠崎勝則　先生（県立広島病院臨床腫瘍科　主任部長） ○がん患者に対する薬剤師の関わり 佐伯康之　先生（広島大学病院薬剤部　薬品情報　室長） ○乳がん治療におけるクリニカルパスを用いた評価 賀出朱美　先生（中国中央病院乳腺診療チーム外来看護部） ○末期がん患者の退院支援事例からみえてくるもの 藤永正枝　先生（広島大学病院地域連携室　看護師長）
第６回	メタボリックシンドロームの克服に向けて～保健学領域からのメッセージ～ 大会長：稲水　惇　教授 平成 21 年 10 月４日	特別講演「メタボリックシンドロームの克服に向けて　～運動療法からのアプローチ～」 佐藤祐造　先生（愛知学院大学心身科学部健康科学科　教授） シンポジウム「特定健診１年の検証」 ○メタボリックシンドローム　～ドック受検者に対する３年間の追跡調査から～ 原　均　先生（NTT 西日本中国健康管理センター　所長） ○特定健診実施における現状と今後の課題 藤井紀子　先生（広島県健康福祉センター健康管理部　室長） ○特定保健指導（運動指導）の現状と課題 松本直子　先生（メディカルフィットネス B-1　支配人） ○臨床生化学検査の生理的変動幅を考慮した新提案と保健指導への応用 松原朱實　先生（広島大学病院診療支援部検査部門　副部門長）
第７回	情報化・グローバル化の中で保健学の目指すもの 大会長：梯　正之　教授 平成 22 年 10 月３日	特別教育講演「よりよい統計解析手法の選択」 青木繁伸　先生（群馬大学社会情報学部　教授） 特別講演「新型インフルエンザなどのグローバル化する感染症にどう立ち向かうべきか」 押谷　仁　先生（東北大学大学院医学系研究科　教授） 指定発言：岸本益実　先生（広島県健康福祉局健康対策課長） 西浦　博　先生（ユトレヒト大学　さきがけ研究員）
第８回	発達障害児の支援態勢の現状と展望 第12回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 第８回大会長： 岡村　仁　教授 合同学会長： 武内和弘　教授 （県立広島大学保健福祉学部） 平成 23 年 10 月 22 日	シンポジウム 基調報告「地域で子どもたちを育む　－発達障害児支援のめざすもの－」 林　優子　先生（県立広島大学保健福祉学部　教授・小児科医） ○発達障がい児の環境を整える 祖父江　育子　先生（広島大学大学院保健学研究科　教授・看護師） ○二次障害を起こさせない発達障害児の支援 石附　智奈美　先生（広島大学大学院保健学研究科　講師･作業療法士） ○発達障害児の保護者のケア 山本　映子　先生（県立広島大学保健福祉学部附属診療所　看護カウンセラー） ○「できるをのばす」作業療法－ NPO 法人ちゃんくすの取り組み－ 西上　忠臣　先生（NPO 法人ちゃんくす　代表・作業療法士） ○ ICT 技術を用いた遠隔発達相談 細川　淳嗣　先生（県立広島大学保健福祉学部　助教・言語聴覚士）

第９回	多様化する社会と人間の健康 第13回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 合同学会長： 　小林敏生　教授 平成 24 年９月 30 日	特別講演『健康格差社会』への処方箋　－社会環境への着目－ 　近藤克則　先生（日本福祉大学社会福祉学部　教授， 　　日本福祉大学　健康社会研究センター長） シンポジウム「多様化する社会の中で，人間の健康と幸福をどのように捉えプロモートするか？」 ○人はなぜ拝み屋に行くのか？　－クライアントのサファリングの理解に向けて 　沖田一彦　先生（県立広島大学保健福祉学部　教授） ○文化と調和するヘルスプロモーション－発展途上国での実践からの学び 　吉田いつこ　先生（天理医療大学医療学部　講師） ○郊外住宅団地のまちづくりと住民の QOL 　間野　博　先生（県立広島大学保健福祉学部　教授） ○地域医療医の立場からみた健康観・幸福観 　竹内啓祐　先生（広島大学医学部地域医療システム学　教授）
第 10 回	ヘルスプロモーションを支える技術 第14回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 第 10 回大会長： 　浦邉幸夫　教授 合同学会長： 　川原田　淳　教授 （県立広島大学保健福祉学部） 平成 25 年 11 月２日	特別講演「生体計測の医療・福祉分野への新展開　－健康・安心生活を支援するヘルスケア・スマートタウンを目指して－」 　山越憲一　先生（金沢大学理工研究域　名誉教授） シンポジウム「ヘルスプロモーションを支える身近な取り組みから確かな技術まで」 ○慢性呼吸器疾患を有する高齢者のヘルスプロモーションにおける地域支援　－理学療法士の立場からの提言－ 　関川清一　先生（広島大学大学院医歯薬保健学研究院　准教授） ○がんと闘う人々へのヘルスプロモーション」 　三木恵美　先生（広島大学大学院医歯薬保健学研究院　助教） ○福祉用具からヘルスプロモーションを考える 　大塚　彰　先生（県立広島大学保健福祉学部　教授） ○ヘルスプロモーションを支える技術：最新の医用画像技術とその未来 　大西英雄　先生（県立広島大学保健福祉学部　教授）
第 11 回	災害復興に果たす保健学の役割 第15回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 合同学会長： 　浦邉幸夫　教授 平成 26 年 10 月 11 日	特別講演「スポーツ外傷の予防　－特にスキー外傷のリハビリテーションの経験から－」 　Anton Wicker　先生（ザルツブルク大学リハビリテーション医療学部教授，ヨーロッパスポーツ連盟会長） シンポジウム「大規模災害に対する保健学への期待」 ○東日本大震災が南相馬市の脳卒中発症率に及ぼす影響 　及川友好　先生（福島県南相馬市立総合病院　副院長） ○緊急被ばく医療チームとしての医療支援を経験して 　飯干亮太　先生（広島大学病院看護部 ICU　看護師長） ○大規模災害時における広島県の取組　～災害時公衆衛生チームの設置及び支援体制～ 　山下十喜　先生（広島県健康福祉局） ○福島県南相馬市での医療支援活動から新しい展開へ 　森山信彰　先生（広島大学大学院リーディングプログラム機構　放射能社会復興コース）

第 12 回	認知症の現状と展望 第16回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 第 12 回大会長： 森山美知子　教授 合同学会長： 小野武也　教授 （県立広島大学保健福祉学部） 平成 27 年 10 月 10 日	特別講演「認知症を持った人への理解より変わる医療・介護」 佐々木健　先生（きのこエスポアール病院　院長） シンポジウム「世界における認知症対策の現状」 ○中国における認知症対策と現状 程　爲平（Cheng Weiping）先生　（中国　黒龍江中醫藥大學　教授） ○ドイツにおける認知症高齢者への支援 Michael Isfort　先生（ドイツ　NRW カトリック大学　教授） ○日本における認知症対策の現状 辻　和夫　先生（広島県健康福祉局地域包括ケア・高齢者支援課）
第 13 回	保健・福祉学で進む国際戦略・イノベーション －各専門領域で進む先駆的な研究動向－ 第 17 回広島保健福祉学会学術大会　合同学会 合同学会長： 森山美知子　教授 平成 28 年 10 月 15 日	国際カンファレンス「人口構造・疾病構造の変化，国際的な問題に対応するためのイノベーション」 基調講演「21 世紀の保健課題～グローバル化と高齢化，感染症と非感染症のダブルバーデン」 茅野龍馬　先生　（WHO 健康開発総合研究センター　テクニカルオフィサー） ◆ Grameen's approach to create community healthcare entrepreneurs （コミュニティ・ヘルスケア・マイクロ起業家を創造するためのグラミン九州大学の挑戦） Ashir Ahmed　先生（九州大学大学院システム情報科学研究院・持続可能な社会を拓く決断科学大学院　准教授） ◆ The Challenge of Health and Welfare System Design - Case Finland （健康福祉システム設計における課題：フィンランドのケース） Paul Lillrank　先生（フィンランド Aalt 大学　教授） シンポジウム「地域包括ケアシステム：イノベーションとチームアプローチの実際」 ○広島県東部保健所（尾三圏域）の取組について－地域包括ケアシステムの確立に向けて－ 舛広　猛　先生（広島県東部保健所） ○呉市モデル：地域包括ケアシステムとデータヘルス計画－フレイルから高度ケースマネジメントまで－ 前野尚子　先生（呉市福祉保健部福祉保健課） ○中山間地域在住高齢者の生活支援方法構築のためのアクションリサーチ 岡田麻里　先生（県立広島大学保健福祉部　准教授） ○広島県心臓いきいき推進事業：チーム医療で心不全の入院を半分に減らす！ 中山　奨　先生（広島大学病院心不全センター） ○夢のみずうみ村のチャレンジ　リハビリテーションで在宅生活を支援する 岡田雄三　先生（社会福祉法人夢のみずうみ村　理事長）

第４回広島保健学学会学術集会を振り返って

第４回大会長：清水　一
現所属：賀茂吹奏楽団，井野口病院，広島大学名誉教授

全ての始まりは，本邦初の作業療法や理学療法の４年制大学教育の始動であった（看護は中国初）．迫り来る社会の急速な高齢化を見越し，高等教育を受けた医療専門職種の拡充と拡散のための緊急国策である．この分野の先進国である米国は第二次大戦終了頃に数校の大学教育が出現し，約 30 年かけ修士から博士課程をもつ大学が出現した．当然，大学の教員を専門職以外が占めることは無かった．これに比べると異様な速さで半数以上の専門職以外の教授の支援就任のもと，広島大学医学部に保健学科が設立され，間髪を入れずに僅か６年後に博士課程までが設立され，今世紀初頭に第１回の博士を送り出した．ICF モデルに例えると高等教育は構造と機能の調和ある進展が望ましいところであるが，簡単に云うと構造としての『器』先行方略の突出であった．多くの専門職教員にとっては本邦初の機構構築を慌ただしくこなし，教育・研究成果を醸成する余裕がない状態で起こりくる事態に俄に対応していたように記憶する．通常の役割以外に新たにこの第４回学会に課せられた課題は「広島大学保健学学会ではなく，日本，世界に開かれた保健学学会への歩みだし」であった．そのため当時，広島県で同種の大学教育を実施していた，県立広島大学と広島国際大学と日本赤十字広島看護大学校への学会企画への参加と鼎形式のシンポジウム実施をした．意図は世界へ開かれた学会であったが，次年度からは県立広島大学との隔年主催へと趣旨が変わって９年続き，今回閉会を迎えることになった．この間, 設立を導引した専門職のリーダは全て別の大学に転職した．日本全体の博士課程前･後期課程をもつ高等教育機関の数は飛躍的に増え，理学療法養成校だけでも４年制大学 98 校中 36 校に及ぶ（H26）．この閉会を機に「世界トップ 100 の総合研究大学」の掛声で『器』を飾るのでなく地道に成果を醸成させる機能を追求されんことを祈念したい．

第６回広島保健学学会学術集会を振り返って

第６回大会長：稲水　惇
現所属：広島グリーンヒル病院院長

平成 21 年の第６回広島保健学学会の会長を務めさせていただきました．平成 27 年までにメタボリックシンドローム該当者及び予備軍の 25％減を目標に平成 20 年４月より特定健康診査･特定保健指導（通称メタボ健診）が始まり，このことから学会のテーマを「メタボリックシンドロームの克服に向けて～保健学領域からのメッセージ～」としました．

学会１日目には, 19 題の一般発表があり, 特別講演では, 愛知学院大学の佐藤祐造教授に「メタボリックシンドロームの克服に向けて～運動療法からのアプローチ～」と題して，身体運動の効果，運動処方の実際について講演していただきました．午後のシンポジウムでは,「特定健診１年の検証」と題して, 原均先生には「メタボリックシンドローム～ドック受検者に対する３年間の追跡調査から～」, 藤井紀子先生には「特定健診実施における現状と今後の課題」, 松本直子先生には「特定保健指導の現状と課題」，松原朱實先生には「臨床化学検査の生理的変動幅を考慮した新提案と保健指導への応用」について講演していただきました．

学会２日目の国際シンポジウムでは，広島大学の山根公則准教授には広島大学第２内科で 1960 年代から行われているハワイ島およびロサンゼルス在住の日系米人と日本人の医学比較調査をもとに，日系米人と日本人のメタボリックシンドロームの現状について，芦鴻雁先生，汪宏莉先生，王芸先生には，経済成長に伴って生活習慣病が急増している中国におけるメタボリックシンドロームの現状と健康増進への取り組みついて講演していただきました．

学会テーマも好評で，質疑応答も活発で，学会もスムーズに運営できましたが，近隣の大学，専門学校，医療施設への広報活動にも関わらず，学外からの参加者が少なかったのが反省すべき点でした．

「歴史」の中の第７回広島保健学学会学術集会

第７回大会長：梯　正之
現所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究院　教授

広島保健学学会が第７回目を迎えたのは，国立大学が法人化して第二期中期計画に入った，2010 年のことでした．日本では，グローバル化が進む中での厳しい経済状況や，少子高齢化が進み国の財政運営が困難さを増す中，国立大学にも一層の効率化や成果達成が求められていました．また，2009 年から 2010 年にかけては，新型インフルエンザが国際的に流行し，国の感染症対策にも不安がよぎっていました．そのような中，学術集会ならびに国際シンポジウムが 10 月３日（日）・４日（月）に広島大学広仁会館にて開催されました．学術集会のテーマは，「情報化・グローバル化の中で保健学の目指すもの」，国際シンポジウムのテーマは，「広島から世界へ－平和構築と保健学－」でした．

私が保健統計や疫学の授業を担当し，感染症の数理モデルの研究をしていることもあり，特別教育講演には青木繁伸先生をお招きし，「よりよい統計解析手法の選択」についてお話いただきました．また特別講演では，押谷仁先生に「新型インフルエンザなどのグローバル化する感染症にどう立ち向かうべきか」について講演していただいた後，その方面に詳しい方を交えて議論していただきました．ちょうど，私のところで大学院を修了した西浦博さん（当時，ユトレヒト大学・さきがけ研究員）も帰国中で，ＷＨＯでの活躍ぶりなどを話してくれました．国際シンポジウムでは，篠田英朗先生を中心に，「平和構築で必要な人材と活動事例」を巡ってパネルディスカッションをしていただきました．できるだけ，全国区・国際的にも活躍の先生方をお招きすることを心がけて企画いたしました．

歴史というのは，単に事実を羅列するものではなくて，後から意味を見いだすべく過去を振り返るものという人がいます．この学術集会が，データから真実を抽出できる分析スキルを学び，大きな視野で人間の保健を考える手助けとなったことを願います．ご協力・ご参加いただいた皆様に改めて感謝いたします．日本の社会にさらに大きな衝撃を与えた東日本大震災・福島原発事故が起きたのはそれからわずか５か月ほど先のことでした．

第８回広島保健学学会学術集会・第 12 回広島保健福祉学会学術大会合同学会を振り返って

第８回大会長：岡村　仁
現所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究院　教授

2011 年（平成 23 年）10 月 22 日に開催されました，広島保健学学会第８回学術集会を担当させていただきました．この会は，広島保健福祉学会第 12 回学術大会との合同大会ということで，広島大学と県立広島大学が合同で開催した記念すべき第１回大会にあたります．

初の合同大会であり，右も左もわからないような状態でのスタートとなり準備段階から戸惑うことも数多くありましたが，是非第１回目を成功させたいという両大学関係者の思いのもと，頻繁に情報交換を進めながら検討を行い開催にたどり着いたのが思い起こされます．第１回の合同大会は県立広島大学（三原市）で開催されたため，それまでの学術集会よりは広島大学の関係者の出席は少なかったことは否めませんが，保健学領域において同じ県内にある他大学および他地域の方々との交流が実現し，大変活気のある学会となり，参加者にとっても大きな刺激となったようでした．

学術集会，合同大会とも平成 28 年度で終了となるのには一抹の寂しさがありますが，第８回学術集会から始まり６年間にわたって開催されてきた合同大会の成果は，地域における保健・医療・福祉の向上に多少なりとも貢献できたのではないかと信じています．また，これまでの経験は，今後も他大学や他地域との交流をさらに進めていくという次のステップへの礎になったのではないかと思います．

第9回広島保健学学会学術集会・第13回広島保健福祉学会学術大会合同学会を振り返って

合同学会会長：小林　敏生
現所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究院　教授

本学会は，広島大学と県立広島大学の第2回目の合同学会として，2012年9月30日に広島大学広仁会館にて開催されました．前年には，未曾有の災害である東日本大震災が発生し，その苦難を乗り越えて翌年のロンドンオリンピックでは日本がメダルラッシュに沸いたことなど，日本人の「絆」や「信頼感」が世界に大きく注目された年であったことが強く印象に残っています．このような社会背景を踏まえて，当学会のテーマを，『多様化する社会と人間の健康』として，拡大する社会格差や健康格差の中で人の健康や幸福を模索することを試みました．特別講演では，「健康格差」研究の第一人者である日本福祉大学教授（現，千葉大学教授）の近藤克則先生をお招きして，「健康格差社会への処方箋－社会環境への着目－」と題して，「健康格差」の縮小のための社会環境整備の重要性や，信頼感や絆などの地域における「ソーシャル・キャピタル」の重要性をご紹介いただきました．シンポジウムでは，「多様化する社会の中で，人間の健康と幸福をどのように捉えプロモートするか？」を企画し，広島大学と県立広島大学に関係する多彩なバックグラウンドをお持ちの4名の先生から全人的医療・ケアに関する包括的アプローチを中心に講演をいただきました．多様化する社会の中で拡大する健康格差を是正し，人間の健康と幸せをどのように推進するかについて，多くの参加者とともに分野横断的に活発な議論を行いました．

昨年は英国がEUを離脱，先日はアメリカの新大統領が誕生するなど，世界が想定外の方向へ急速に動いていることを実感させられます．我々保健学を志す者を取り巻く環境も，社会格差や健康格差の拡大に象徴されるようにまさに大きな変化の時代を迎えています．このたび本学術集会が終了となることには一抹の寂しさを感じますが，保健学を志す我々は今後も協同し，人間が健康やQOLを高めより幸せな人生を送れることを目標として，日々研鑽してゆかねばと改めて感じています．

第11回広島保健学学会学術集会・第15回広島保健福祉学会学術大会合同学会を振り返って

合同学会会長：浦邉　幸夫
現所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究院　教授

私は平成26年に，第11回広島保健学学術集会・第15回広島保健福祉学会学術集会の学会長を担当させていただきました．私の学位論文は「スキーによる膝前十字靱帯損傷予防」というテーマでした．その頃より，ザルツブルク大学リハビリテーション医療学部のAnton Wicker先生と交流を持つようになりました．学会長を引き受けるなら，特別講演ではWicker先生をお呼びしたいと考えていました．実際に，「スキーを中心にしたスポーツ外傷予防」の講演内容は素晴らしいもので，ふだんスポーツ医学に通じていなくても十分に興味の持てる内容になったと思います．

もうひとつの目玉は，「大規模災害に対する保健学への期待」として，シンポジウムを企画しました．特に東日本大震災での苦境のなかで，南相馬市立総合病院の果たした役割と，広島大学から私たちの行った支援について話し合われました．それがひとつのきっかけになり「広島大学大学院リーディングプログラム機構放射線災害復興コース」が立ち上がったことなど，感慨深いものがあります．

その後，平成28年3月には「スキー外傷予防の国際学会」を私が学会長になり，福島県で開催することができました．福島の復興の一助になったかと考え，世界各地から参加された多くの方々に福島のことと，広島大学を知っていただけたと思います．

このように私たちの広島保健学学会学術集会が果たした役割は大きく，これが終了することは私にとっては「青天の霹靂」でした．他の大きな学会が私たちの保健学学会の機能を有しているとはいえ，一番近くにある足がかりの学会を失うことは，大変残念な気持ちでした．

第 13 回広島保健学学会学術集会・第 17 回広島保健福祉学会学術大会 合同学会を振り返って

合同学会会長：森山　美知子
現所属：広島大学大学院医歯薬保健学研究院　教授

第６回となる県立広島大学との合同学会が，2016 年 10 月 15 日（土），「保健･福祉学で進む国際戦略･イノベーション：各専門領域で進む先駆的な研究動向」をテーマに，保健学研究科棟で開催されました．

国連は，2015 年，2030 年をゴールに，グローバリゼーションの波の中で人々の流動性の強化，高齢化と格差の拡大，非感染性疾患 / 慢性疾患の占める割合の増加，そしてパンデミックに代表される感染症の恐怖への対応など，「世界を変えるための 17 の目標：Sustainable Development Goals（SDGs）」を掲げました．本学会では，この世界的な課題と，地域包括ケアに代表されるローカルな課題をテーマに取り組みました．

午前中の国際カンファレンスでは，WHO 神戸センターから茅野氏を迎え，「21 世紀の保健課題～グローバル化と高齢化，感染症と非感染症のダブルバーデン」を演題に会場を引き付ける講演（問題提起）をいただきました．続いて，九州大学から Ahmed 先生が貧困層にヘルスケアを提供する九州大学とグラミン銀行とのイノベーションについて，続いてフィンランド・Aalt 大学 Lillank 教授から，質を上げ，コストをコントロールするヘルスケア改革の取り組みについてお話をいただきました．いずれも刺激的な内容で，大いに盛り上がりました．

午後からは，３会場に分かれ，日本の先端を走る広島県の地域包括ケアシステムについて，広島大学や県立広島大学が関与する（産）官学連携の展開事例が発表されました．同時開催セッションでは，理学療法の英知を注ぎ込んで迎える 2020 年の東京オリ・パラピックを視野に入れたスポーツリハビリテーションのセッション，最新の言語聴覚療法，そして，東フィンランド大学から看護の教授をお迎えして，今，日本がまさに取り入れようとしている「出産から子育てまでの一貫した家族サポートシステム：ネウボラ」の紹介，ドイツ NRW カトリック大学大学院生をお迎えしての「ドイツにおけるアルコール依存症の親の子供たちへの支援」をソーシャルワークの立場からディスカッションいただきました．

参加者総数 271 名（約 300 名），ポスターセッションでは，英語 10 題（１題取り下げ），日本語 35 題の大学院生を中心とした日頃の研究成果の発表があり，活発な議論が行われました．

最後に，広島大学，県立広島大学から退官された懐かしい先生方をお迎えし，設立当初の双方の大学の様子を聞きながら，2004 年にスタートした保健学学会学術集会はその役割を終え，幕を閉じました．これまで保健学学会を牽引してこられた歴代研究科長をはじめ，準備，開催に当たりましては教員の先生方に深く感謝を申し上げます．